

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 8 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370081

研究課題名(和文) 徴候的知におけるダイアグラムの表現をめぐる思想史的研究

研究課題名(英文) An intellectual historical study on diagrammatic expressions in symptomatic knowledge

研究代表者

田中 純 (TANAKA, Jun)

東京大学・総合文化研究科・教授

研究者番号：10251331

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：ヴァルター・ベンヤミンやアビ・ヴァールブルクといった思想家たちが草稿などにおいて用いた、学術的言語表現と図像との中間的存在であるダイアグラムについて比較研究を行ない、徴候的知の表われとしてのダイアグラムが共通して有する規則性やその文化的背景を分析した。また、W・G・ゼーバルトの小説に数多く挿入されている写真を一種のダイアグラムとして考察し、それらが徴候的知としての歴史的記憶を喚起していることを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：I made a comparative study on diagrams, which Walter Benjamin, Aby Warburg and other scholars used in their manuscripts, as intermediate between academic discourse and image to analyze the rules and cultural backgrounds that diagrams have in common as an expression of symptomatic knowledge. In addition, I investigated photographs that W. G. Sebald composed with his texts as a kind of diagram to show that these photographs evoke historical memory as symptomatic knowledge.

研究分野：思想史

キーワード：ダイアグラム 徴候的知 ヴァルター・ベンヤミン アビ・ヴァールブルク W・G・ゼーバルト 写真
歴史的記憶

1. 研究開始当初の背景

近年のイメージ論や美術史研究においては、必ずしも図像表現と直接の関係をもたない哲学、自然科学などの分野における、学術的言語表現と図像との中間的存在である「ダイアグラム」の果たしてきた機能への関心が高まっている。とくにドイツ語圏ではダイアグラムの規則性を探究する「Diagrammatik」や「Diagrammatologie」が盛んに提唱されている。そこでとりわけ注目されるのは、学術的知の体系を事後的に図案化したダイアグラムよりもむしろ、思想家や科学者たちが知的発見の過程で活用した視覚的イメージとしてのダイアグラムの機能である。

これは本研究の研究代表者・田中純が取り組んできた「徴候的知」に深く関わっている。ここで言う「徴候的知」とは、イタリアの歴史家カルロ・ギンズブルグが論文「徴候」(1979年)において指摘した、太古の狩人の文化にまで遡りうる「推論的パラダイム」であり、医学的症候学に基礎を置いて、1870年代以降に哲学、美術史、精神分析、文学といったさまざまな分野で再活性化された知の様態である。

田中は、みずから研究代表者となった平成12～14年度科学研究費(基盤研究C)「イメージとその記憶の分析に関する方法論的思想史的研究 20世紀ドイツにおける図像学の成立とその背景」、平成15～17年度科学研究費(基盤研究C)「イメージ分析における形態学的方法の思想史的研究 1920～30年代における文化科学の方法論とその背景」、平成18～20年度科学研究費(基盤研究C)「イメージ分析に対する生命形態学の影響をめぐる思想史的研究」、平成21～23年度科学研究費(基盤研究C)「徴候的知」の系譜をめぐる思想史的研究」といった一連の研究において、一貫して徴候的知の働きを分析する作業を進めてきた。

これらの研究を手がけるなかで田中は、ダイアグラムの表現が徴候的知における細部への注視と密接に関わり合っている点を発見し、ダイアグラムの創造を徴候的知に関連づけて、視覚的イメージが知的発見を促すプロセス解明への展望を得た。この着想を踏まえて田中は、徴候的知の系譜におけるダイアグラムの図像表現に焦点を絞ることで、発見法的ダイアグラムが生みだされる思想史的な諸条件を解明するとともに、その規則性や作用の論理を像行為(Bildakt)理論などの知見のもとに分析する、本研究を構想するにいたった。

2. 研究の目的

本研究は次の4点を目的とした。

(1) 近年、アーカイヴ資料が書籍化されたことなどにより、手稿における細字体の筆跡や独自のダイアグラムの表現が明らかにされているベンヤミンについて、ダイアグラム論の視点から図像的表現手法の総合的考察と

分類を試み、特徴を解明する。さらに、ベンヤミンと近い関係にあった同時代の批評家・思想家であり、建築家出身でとりわけ視覚的表現に造詣の深かったジークフリート・クラカウアーを比較対象として、クラカウアーにおけるダイアグラムの図像表現についても同様の調査・分析を行なう。

(2) (1)で分析されたダイアグラムの表現を、すでに研究を別途手がけているアビ・ヴァールブルクにおける同種の表現と比較して検討することにより、徴候的知の表われとしての図像表現が共通して有する規則性や、その背景となっている文化的諸要素について解明する。ベンヤミン、クラカウアー、ヴァールブルクを選ぶのは、世代は異なるものの、ユダヤ人であることと、「細部」に対する注目という徴候的知の特徴をなす思考のスタイルの通底性による。この作業を通じて、ベンヤミン、クラカウアー、ヴァールブルク自身が反省的に展開しているイメージをめぐる思想(例えばベンヤミンにおける「思考のイメージ(Denkbild)」といった概念)を、いわば「ダイアグラムの知」の理論へと再構成する。

(3) ダイアグラムの表現が発見法的に機能するのは、イメージが触発する身体の情動に関わっていると思われるため、ドイツの美術史家ホルスト・ブレーデカンブがヴァールブルクの思想を背景に提唱している「像行為」理論や認知科学の知見などをもとに、ダイアグラムが学術知の創出・認識過程においてどのような働きをしているのかを、より一般的な観点から考察する。

(4) 以上の研究は「Diagrammatik」や「Diagrammatologie」といった近年の研究動向を積極的に参照されながら遂行されるが、最終的にはダイアグラムの表現、とりわけ徴候的知の触媒としてのダイアグラムへのこうした注目そのものを対象に、20世紀前半までに比重の置かれた(1)～(3)の考察を基礎として、「Diagrammatik」や「Diagrammatologie」の勃興にいたる系譜とその背景を思想史的に明らかにする。

3. 研究の方法

ベンヤミンとクラカウアーについては、アーカイヴにおけるオリジナル草稿を対象として、ダイアグラムの表現についての網羅的な調査をまず行なう。画像データで記録されたその成果をデータベースとし、さらに分類を加えて整理する。次に、それぞれのダイアグラムとそれが位置するコンテキストとの内容的関連を読み解き、ヴァールブルクにおけるダイアグラムを加えて、三者間で比較することで、共通点と相違点を析出する。その結果と彼ら自身のイメージ論を付き合わせ、この三者におけるダイアグラムの知の理論を解明する。20世紀前半のこのパラダイムとの比較のもとに、「Diagrammatik」や「Diagrammatologie」といった近年の動向

が依拠するダイアグラムの知的パラダイムを明確化し、その思想史的背景を考察する。

4. 研究成果

まず平成 25 年度においては、ベンヤミンについては、アーカイヴ資料のカタログや著作集ほかの情報をもとに、彼のテキストに現われるダイアグラムの表現およびそれらのイメージをめぐる言及を整理した。ジークフリート・クラカウアーについては、マールバッハのドイツ文学アーカイヴが所蔵する自筆草稿などの一次資料を対象として、ダイアグラムの表現に焦点を絞った調査を実行した。さらに、文化人類学者マイケル・タウシグが、「歴史のイメージ」をめぐるヴァルター・ベンヤミンの思想から受けた強い影響のもとに展開している、フィールドワークにおけるドロ잉を一種のダイアグラムととらえる議論を手がかりとして、ドロ잉や写真までも包摂するダイアグラム論の理論的枠組みの可能性について考察した。

理論的反省からアーカイヴ調査にいたるこの過程では、徴候的知が発揮される契機として、通常のダイアグラムの図表ばかりではなく、写真のイメージが大きく関与していることが見出された。そしてここから、作家 W.G. ゼーバルトの小説に数多く挿入されている写真が、一種の徴候的知としての歴史の記憶を喚起している点に着目し、この作家の独特な文学世界の形成にこうした写真がどのように寄与しているのかという分析をダイアグラム論と関連づける視座を得た。ドイツ文学アーカイヴにはゼーバルトの作品草稿が収蔵されているため、いくつかの作品に関しては、草稿の綿密な調査を行なうことができた。

ダイアグラムの表現が発見法的に機能する背景には、イメージが身体を触発し情動を喚起する作用があるものと思われる。この作用をめくり、アビ・ヴァールブルクをはじめとする歴史家たちにおける徴候的知として、過去を身体的に感覚する「過去の経験」ないし「歴史経験」のなされ方について、とくに視覚的な要素との関わりを中心に、ヴァールブルクとヨハン・ホイジンガを比較した考察を試みた。

平成 26 年度には、前年度のドイツ文学アーカイヴにおける調査をもとに、作家 W.G. ゼーバルトの小説に数多く挿入されている写真が、一種の徴候的知としての歴史の記憶を喚起している点をめくり、この作家の独特な文学世界の形成にこうした写真がどのように寄与しているのかという分析をダイアグラム論の観点から展開し、論文にまとめた。同じ観点から、ロラン・バルトの写真論『明るい部屋』におけるノをめぐる写真とテキストの関係について、ダイアグラム論的な分析を行ない、「アナモルフォーズ」の手法によって隠されたメッセージをバルトのポートレイト中に読み取るという成果を得て、これ

も論考として発表した。

ダイアグラムの表現が発見法的に機能する背景にある、イメージが身体を触発し情動を喚起する作用をめくり、アビ・ヴァールブルクをはじめとする歴史家たちにおける徴候的知を、過去を身体的に感覚する「過去の経験」ないし「歴史経験」のうちに探究する試みをさらに継続させ、ヴァールブルクとヨハン・ホイジンガを出発点としつつ、フランク・アンカースミット、ハンス・ウルリッヒ・グンブレヒト、エルコ・ルニアといった現代の歴史理論家たちの議論を参考に、総合的な考察を行なった。

最終年度である平成 27 年度には、この間の研究の総括として、ベンヤミンにおけるダイアグラムの表現をヴァールブルクにおける同種の表現と比較して検討することにより、徴候的知の表われとしての図像表現が共通して有する規則性や、その背景となっている文化的諸要素を検討するとともに、彼らが展開しているイメージをめぐる思想を「ダイアグラムの知」の理論へと再構成する作業を行ない、その成果を書物に収めるべく、論文にまとめている。その際、クラカウアーについては、「歴史のマイクロロジー」の理論的考察の次元で、現象の「細部」に着目する方法における徴候的知と視覚的要素との関係性を、前二者と比較しつつ考察の対象としている。

このような「ダイアグラムの知」の思想的整理のうえで課題として設定した、ゼーバルトの小説における写真の機能・効果については、2016 年 4 月に刊行された単著『過去に触れる 歴史経験・写真・サスペンス』において、一章をあてて詳細に検討した。この書物では、ベンヤミンの写真論のほか、ヴァールブルクとヨハン・ホイジンガの比較による歴史家における「歴史経験」の問題を論じるなど、歴史家や思想家、作家たちが過去の事象をどのように感覚的に経験し、最終的に言語テキストや視覚的媒体によって表現するにいたっているのか、つまり、どのような形式で他者に歴史経験を伝達しようとしていたのかという点を多面的に明らかにしており、本研究課題のひとつの成果と言えるものである。

2016 年 4 月には「像行為」理論を提唱しているホルスト・ブレーデカンブラを日本に招聘して国際会議「思考手段と文化形象としてのイメージ」を開催し、認知科学の知見などをもとにした、学術知の創出・認識過程解明に関する討議を行なった。これにより、いままでの思想史的考察を、ダイアグラムの作用に関わる、より経験科学的な方法による分析と結びつける端緒も得ている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 13 件)

田中純「総合的身体論へ 神経系人文学の制度的条件と未来」、『思想』第 1104 号(2016 年 4 月号) 岩波書店、2016 年、2~5 頁、査読無。

田中純「モニタージュノパラタクシス(1) イメージによる歴史叙述の「リアリズム」」、『UP』521 号(2016 年 3 月号) 東京大学出版会、2016 年、47~52 頁、査読無。

田中純「「歴史の場」の航海者 「写真家」多木浩二」、『UP』518 号(2015 年 12 月号) 東京大学出版会、2015 年、38~44 頁、査読無。

田中純「流氓のアーカイヴ W・G・ゼーバルト『アウステルリッツ』からの漂流」、『UP』515 号(2015 年 9 月号) 東京大学出版会、2015 年、40~47 頁、査読無。

田中純「イメージのパラタクシス 1945 年 8 月 6 日広島、松重美人の写真」、『UP』512 号(2015 年 6 月号) 東京大学出版会、2015 年、36~42 頁、査読無。

田中純「盲目の旅 畠山直哉『気仙川』について」、『UP』509 号(2015 年 3 月号) 東京大学出版会、2015 年、46~52 頁、査読無。

田中純「キンポウゲを摘むベンヤミン ジゼル・フロイントの一枚の写真について」、『UP』506 号(2014 年 12 月号) 東京大学出版会、2014 年、50~57 頁、査読無。

田中純「『明るい部屋』のサスペンス 「温室の写真」のアナモルフォーズ」、『UP』503 号(2014 年 9 月号) 東京大学出版会、2014 年、51~59 頁、査読無。

田中純「迷い子の写真たち(ストレイ・フォトグラフィス) W・G・ゼーバルトによる「歴史の構築」」、『UP』500 号(2014 年 6 月号) 東京大学出版会、2014 年、48~55 頁、査読無。

田中純「過去に触れる ホイジンガの秋、ヴァールブルクのニンフ」、『UP』497 号(2014 年 3 月号) 東京大学出版会、2014 年、37~44 頁、査読無。

田中純「ハデスの吐息 アーシア探索(続)」、『UP』494 号(2013 年 12 月号) 東京大学出版会、2013 年、48~55 頁、査読無。

田中純「剥ぎ取られたイメージ アウシュヴィッツ=ビルケナウ訪問記」、『UP』491 号(2013 年 9 月号) 東京大学出版会、2013 年、44~51 頁、査読無。

田中純「夢のなかの赤い旗 アーシア探索」、『UP』488 号(2013 年 6 月号) 東京大学出版会、2013 年、49~55 頁、査読無。

〔学会発表〕(計 5 件)

田中純「日常の色 牛腸茂雄の写真を通して」、『青山学院大学文学部フランス文学科・青山フランス文学会共催国際シンポジウム「日常 とは何か 西欧の場合、日本の場合」』、2015 年 12 月 5 日、青山学院大学(東

京都渋谷区)

田中純「ダイアグラムと発見の論理 アーカイヴに眠る「思考のイメージ」」、『第 4 回アーカイブ研究会、2014 年 10 月 31 日、京都市立芸術大学芸術資源研究センター(京都府京都市)

Jun Tanaka, Dystopian Visions in Gilbert Clavel's An Institute for Suicide, The Fourth International Conference of EAM, August 31, 2014, Helsinki, Finland. ヨーロッパ・アヴァンギャルド・モダニズム学会第 4 回国際大会、2014 年 8 月 31 日、ヘルシンキ(フィンランド)

Jun Tanaka, Futuristic archaism or archaic futurism: Gilbert Clavel's vision of time in Das Teleskop, MDRN/KULeuven: Time and Temporality in European Modernism, Sep 18, 2013, Leuven, Belgium. ルーヴェン・カトリック大学 MDRN 国際シンポジウム「ヨーロッパ・モダニズムにおける時間と時間性」、2013 年 9 月 18 日、ルーヴェン(ベルギー)

Jun Tanaka, The Chthonic Architecture of Gilbert Clavel: A Study on the Relationship among Architectural, Geographical, and Bodily Imagination, 19th Jubilee International Congress of Aesthetics, July 26, 2013, Krakow, Poland. 第 19 回国際美学学会、2013 年 7 月 26 日、クラクフ(ポーランド)

〔図書〕(計 7 件)

田中純『過去に触れる 歴史経験・写真・サスペンス』、羽鳥書店、2016 年、総ページ数 620 頁。

Jun Tanaka et al, David Ayers, Benedikt Hjartarson, Tomi Huttunen and Harri Veivo (eds.), *Utopia. The Avant-Garde, Modernism and (Im)possible Life*. Berlin and Boston: Walter de Gruyter, 2015, pp.493-502 (*Dystopian Visions and Ideas of Death as A Transformation in Gilbert Clavel's An Institute for Suicide*). Total 532 pages.

田中純 他、石田英敬、吉見俊哉、マイク・フェザーストーン編『デジタル・スタディーズ 3 メディア都市』、東京大学出版会、2015 年、61~82 頁(「生態学的都市論のために 「ベンヤミン的方法」と多孔性」)。総ページ数 364 頁。

田中純 他、鍛治哲郎・竹峰義和編『陶酔とテクノロジーの美学 ドイツ文化の諸相 1900-1933』、青弓社、2014 年、191~221 頁(「アビ・ヴァールブルクにおける陶酔とメランコリーの認識法」)。総ページ数 281 頁。

田中純、山口保『時軸(ときじく)』、新宿書房、2014 年、134~136 頁(「岩を摩(す)る 地質学的崇高のまなざし」)。総ページ数 141 頁。英訳: Jun Tanaka, *Stroking Rocks*:

Gazing at the Geological Sublime. Tr. by Keiko Tsuneda and John D. Swain. In: Tamotsu Tamaguchi, The Axis of Time. Tokyo: Shinjuku Shobo, 2014, pp.137-139.

田中純、マッシモ・カッチャーリ『死後に生きる者たち オーストリアの終焉 前後のウィーン展望』、上村忠男訳、みすず書房、2013年、328～337頁（「哀悼劇の天使的音楽に寄せて」）。総ページ数 360 頁。

田中純、グスタフ・ルネ・ホッケ『マグナ・グラエキア ギリシア的南部イタリア遍歴』、種村季弘訳、平凡社ライブラリー、2013年、347～370 頁（「レヴィヤタンとグラエクリたち-----『マグナ・グラエキア』の「消え失せた顔」」）。総ページ数 370 頁。

6 . 研究組織

(1)研究代表者

田中 純 (TANAKA Jun)

東京大学・大学院総合文化研究科・教授

研究者番号：1 0 2 5 1 3 3 1